

極雷剣士のエゴイズム

カルピス信者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

承認欲求の権化のような主人公が、ひたすら評価を求めて異世界を生き抜く話。傍らには、彼を真人間に戻そうとする少女が…？

目次

雷の剣士、雷の魔女	1
問答	49

雷の剣士、雷の魔女

地面を灰色に染める、狼のような魔物。その死骸の数は優に百を超え、大半が焦げ臭い匂いを放っている。毛皮はほとんどが使い物にならず、肉も不味いが——素材として無価値という訳でもない。その証拠に、回収業者がドンドンと死骸を荷馬車へ積み込んでいく。

それを崖の上で見下ろす僕の横には、金髪をたなびかせて物思いに耽る美青年がいた。魔物の大部分は僕が倒したものだ、隣の彼も少なからず活躍していた。流麗な剣技が冴え渡る、巷でも大人気の二枚目剣士だ。そんな彼をじつと見ていると——視線に気が付いたのか、こちらを見返してきた。

「…なんだ？」

「——実は最近、悩みがあつてさ。聞いてくれるかい？」

「断る」

「ありがとう。それでさあ…」

「断ると言ったが」

「まーまー、聞いて減るもんじゃなあって」

「俺の時間が減る」

…友達とは思えない辛辣な対応である。しかしこの無愛想をクールと言い換えて、カッコイイとほざく婦女子のなんと多いことか。いや、悔しくなんてないけどね。ほんとに。どうせいざ付き合うと『貴方って面白くないのね』とか言われるタイプの野郎だ、この男は。僕が喋りかけなければ、いつまでも無言でい続けるのだ。

「そう、それで悩みの方なんだけど……僕って過小評価されすぎじゃない?」

「評価が足りないと言う奴ほど、自己評価が高すぎる傾向にあるな」

「いや、僕はもつと褒められてもいい筈だ! 街へ入ればパレードが開かれ! 城へ入れば可愛い王女が迎えてくれてもいいくらい!」

「そうですね」

「なんだよその『心底くだらない』みたいな顔は」

「心底くだらんからだ」

「そうは言うけども! やっぱ最強に相応しい待遇つてもものがあるじゃん!」

「何が言いたいんだ?」

「もつとちやほやされたあい……!」

「俗物め」

「俗なことが悪いことみたいに言うのはやめてよね。人の世に生きる限り、ついてまわるもんだろ？」

「人のことなど気にせず、己を高める努力をしろ」

「もう充分に高まつてるつて。僕より強い奴とかいる？」

「…真竜エトワールに……伝説の悪神とか……いるだろう」

「そんなのが僕と戦う理由ある？ だいたい努力なら死ぬほどしたつての！ 僕より努力してて僕より弱いやつもそりやいるだろうけど！ それでも僕は頑張った！」

「自分を褒めるのは、死ぬ間際だけにしておけ」

「いやだね。僕は相対評価の方が好きなんだ！ 自分を高めるのは、他者がいてこそさ。どれだけ自分が弱くたっていい——他人がそれ以上に弱いなら……！」

「志が低い……！」

蔑むような視線が僕を貫く。やだやだ、強さにストイックな男はこれだから。どれだけ強くなるうが、相手がいないんじゃない？ 僕はもう、この三年のあいだ死物狂いで頑張った。そろそろ報われてもいいんじゃないだろうか。拾ってくれた傭兵団の団長には感謝しているが、充分に元はとつてもらった筈だ。そう——端的に言えば、長期休暇とか頂いてもいいんじゃないか。いや、いい筈だ。

もつと平和な地方とかに赴いて、人々に感謝とか感謝とか感謝とかされたい。むせび

泣ききれながら『命の恩人ですじゃ……』とか言われたい。『こんなの大したことじゃないですよ〜』とか言つてマウントとりたい。

イヤらしいって？ いいじゃないか別に。だいたい『え？ 僕つてすごいですか？』とかいう奴に善人なんていないんだ。僕みたいに自分の実力がわかつてそれを言うのは、性格が悪い奴。逆に心の底から言つてるんなら、本質的に自分本位な奴だ。

会社員で例えるなら、全てを自分基準にしてしまふ——上司にすると最悪なタイプである。『僕がこうでできるんだから、みんなできるだろう』と言つて無茶振りをすること、なにも変わらない。他人を見ないからこそ、自分が突出していると気付かないってことだし。それで優秀なら救いようもあるが、真逆ならもつとタチが悪い。自分の無能に気付きすらない無能は、グループにいると害以外のナニモノでもないからだ。

…話がそれた。とにかく僕は、この強さをもつと人々の役に立てたい——という建前を胸に、人々から褒めそやされたいのだ。己の内でぐんぐんと肥大化する承認欲求を手懐けて、充足感という幸福で胸を満たしたい。他人の不幸は蜜の味というが、まさにそれだ。他人の不幸を僕が取り除くことによつて感謝され、気持ちよくなる。どつちもウィンウィンで、いいことばかりだろう。

「そういうわけで、僕はしばらく雪猫備兵団を離れる！」
「どういふわけだ」

「心を癒やしたいの！ わかる？」スマホもゲームもAVもない、娯楽皆無な世界で現代人が生きる辛さ！ そりゃあ似^え非^せ中世ファンタジーに転生した奴らだって、チンコ脳になるってもんさ！ セックスくらいしか娯楽がないんだもの！」

「またいつもの発作か…」

「とにかく僕は行く！ 団長には適当に言つといて！」

「わかった」

「もつと引き留めてくれよ！」

「どつちだ」

「もつと惜しまれたいんだよ！ たとえ君でも！」

「しばらく寂しくなるな…」

「ひゅー、そんな感じそんな感じ。僕がいなくなつて初めてわかる大切さを、喧伝しといてくれよ」

小さいため息をつく彼を尻目に、僕は崖を飛び降りた。雷の速度で動ける僕にすれば、傭兵団がどこへ移動しようとすぐに帰還できる。マクスウェルもそれがわかつているから、ことさら引き留めようとはしなかつたのだろう。よし、行くか——新天地。

僕がこの世界にきたのは、およそ三年前だ。まあ一日が何時間かは不明なので、厳密には違うかもしれないけど。とりあえず陽が昇って落ちてを千回ちよつと繰り返したくらいである。幸か不幸か、すぐに傭兵団をに拾われたせいで命を落とすことはなかったが——命を落としかけたことは何度もある。

行く宛がないと人は頑張れるもので、強制的な叩き上げを繰り返した結果、トツプクラスの傭兵という評価を得られるまでになった。ちなみに傭兵とは言っても、実態は猟師に近いものだ。人と戦うことはほぼない……少なくとも、僕は模擬戦以外で戦ったことはない。

繁殖力旺盛おっせいな魔物達は、人の領域よりも遥かに勢力圏を持っている。ただでさえ狭い人類の生存圏を確保するために、僕たちのような傭兵が日々間引きを繰り返していると

いうわけだ。まあ戦争がないというわけじゃないけど、傭兵はそういつた国家間の軋轢あつれきと無縁である。

場所によつて冒険者とか掃除人とか言い方は変わるが、国同士のあれこれに関わらないというのは、概ね同様である。そもそも、魔物を殺すのと人を殺すのはわけが違ふしね。一線は越えたくないという傭兵の方が多数派なのは間違いないだろう。

——さて、そんなこんなで他の大陸にやつてきた僕こと『田中武御雷』たなかたけみかづち。…どうした？ 笑えよベジータ。そうさ、立派なキラキラネームだよ。グレなかつたことが奇跡とさえ言える、ご立派過ぎる名前である。まだリアムとかプリンスとかの方が良かったよ。ほんとに。

まあ基本は武と名乗つてるので、からかわれることもない。独り立ちしたらまず役所に行つて改名するのが僕の夢だ……まあもう無理だけど。運命は数奇すうきなものと言ふけれど、流石に異世界に行くとはまでは思つてなかつた感。不意に郷愁きょうしゅうが襲つてくるのも、もう慣れたものである。

こんな目にあつた僕は不幸と言えるだろうが、世の中にはもつと不幸な人が溢れているのだ。僕は下を見て安心するタイプなので、そこで心の平穩を保つているところもある。なんて嫌な奴だつて？ これが僕なんだから仕方ないだろうが。僕はこんな自分のことが大好きだから、なにも問題はないのだ。

さてさて、今は田舎の、道とも言えないような道をのんびり歩いているところだけど……なにかトラブルの一つでも起こらないものか。魔物に追われる馬車とか、逃げ出した奴隷とか、明らかに問題を抱えていそうなメイドとお嬢様の二人組とか、僕はいつでもウエルカムだ。

雷の速度で動けるんだから、自分から探しに行けるだろって？ いやいや、雷の速度で動けるとはいったが、それに意識が追いつくかといえどそんなことはない。戦闘中に上手く使うのはコツがいるし、移動中は大雑把な方向を決めて、自分という雷を空気に流しているだけなのだ。破裂音が近所迷惑で、本拠地では使えない移動手段である。直接的に村や街へ行かないのも同じ理由だ。

…お、なにやら遠目に村らしきものが見える。魔物とかドラゴンに襲われたりしないかな？ 他人から感謝されるコツとは、不幸な人間を探すことから始まるのだ。奴隷を好待遇で迎え、好かれようとするようなものだ。言いたいわー、良い笑顔で『これが普通なんだよ』とか言つて善人面したいわー。

とりあえず小さい畑を耕しているおっちゃんに声をかけてみる。こういった村の端に住んでいる人は、しょぼくれたおっちゃんでも実は強かったりする場合がある。真っ先に魔物の標的になる関係上、村の防波堤として機能しているのだ。

「いんこちほー」

「む……旅人か？ 珍しいな」

「いきなりで申し訳ないんですけど、魔物とかドラゴンとかに襲われたりしませんか？」

「ほんとにいきなりだな！」

「伝説の薬草でしか治らない重病患者とかでもいいんですけど」

「『でもいい』!？」

「いえ、人の役に立ちたいなって」

「胡散臭っ！ ——別に困ってる人間なんていねえよ」

「つまらない村ですね……」

「喧嘩売ってるのか!？」

トマトっぽい野菜を作っているようなので、お金を払って一つ頂く。瑞々しくもなければ甘くもない、青臭さすら感じるイマイチな味だ。日本で食べ慣れた野菜より美味しいものは、これまで出会ったことがない。品種改良を重ねた研究者やお百姓さんにもっと感謝するべきだったのだろうか。

「まつず……あ、いや。美味しくないですね」

「気の使い方おかしいだろ！ ……というかそれは火入れて食うもんだ」

「ああ、なるほど。ところで伝説の武器が眠る小屋とかはありませんか？」

「こんな田舎になにを求めてるんだお前は…」

「重税に苦しんでたりしませんか？」

「ねえよ」

「悪徳貴族が若い娘をさらっていくとか」

「反乱待ったなしだろ」

「くっ……自立心の高い奴らめ。似非^{えせ}ファンタジーらしく、無能で弱くて虐げられる農

民はいねえのかあ！」

「死ねオラア！」

「——ぐへえっ！」

いい右フックだ……熊くらいなら一撃だろう。なんだか怒らせてしまったようなので軽く謝りつつ、なにか面白い噂でもないか聞いてみる。インターネットなどある筈もなく、情報において重要なのは人の口である。

「なんかこう……なんかありません？」

「ふわっとしすぎだろ……」

「もう伝説とかじゃなくてもいいんで、古い言い伝えとかありませんか？ 口伝のみで

継承される奥義とか」

「だから普通の村になにを求めてんだっつーの」

「おや、お客さんかい？」

すぐ横にある小ぢんまりとした家から、おっちゃんの奥さんらしき女性が出てきた。細身で金髪碧眼の美女だ。なるほど、これは事件である。

「伝説のナントカを探してんだとよ。んなもんある訳ねえつてのによ」

「ふうん…？　もしかしてあの山に眠る伝説の魔神のことかい？」

「なんだそれ!?　俺は聞いたことねえぞ！」

「お婆ちゃんか昔、聞かせてくれたんだよ。あそこには封印された魔神と、それを守る竜がいるつて」

「お前の婆さんつて——ああ、そういうことか…」

「どういうこと？」

「コイツの婆さんはな、与太話をガキに聞かせんのが趣味だったんだよ。真に受けたガキが村中掘り返したり、池で溺れたり、いい迷惑だったぜ」

「そうね。それで泳げなくなつたお馬鹿さんもいるもんね」

「…うるせえ」

僕の目の前でイチヤイチヤするんじゃねーよ。爆発魔法唱えるぞ。使えないけど。しかしお婆さんの与太話か…：意外とこういうところに真実が紛れてたりしない？　どのみち大した時間はかからないし、行ってみるのもいいだろう。

「情報ありがとうございます。とりあえず行ってみるよ！」

「いや、まあ期待しねえ方がいいと思うが——つつーかほんとに魔神がいたとして、どうするつもりなんだよ」

「そりやあまあ、復活させて……世の中が阿鼻叫喚の地獄絵図になったところで、世界を救う勇者として僕が登場するのさ！」

「最悪だコイツ！」

「あつはつは、アンタ面白いねえ。もし本当にいたら教えておくれよ。料金は前払いで払っとくからさ」

そう言つて引つ込んだ奥さんは、なにやら包みを渡してきた。どうやらお弁当を作ってくれたようで、感謝感激である。パンに具を挟んだ簡単なものらしいが、こういうのは味よりも心遣いが嬉しいものだ。見送ってくれる二人に手を振り返し、僕は山へと向かった。

うーん……探索を開始してから小一時間ほど。僕の目の前には、見るからに怪しい境界が張られていた。まさか本当に本当だったのだろうか？ 素晴らしい、あの家のババアは良きババアだったようだ。

魔法とかはイマイチよくわからないので、境界は無理やり絶ち切るとしよう。大抵の魔法は、物理でなんとかなるものだ。世界最高のスパコンだって、ハンマーがあれば容易く壊せる……そんな感じである。まあこのレベルの境界を壊せるのは、早々ないだろうけど。僕ってスゲー。

「ん——防衛システムか……？」

試しに剣でツンツンしていると、空間が揺らいだ。ざわりと木々が震え、空気が冷えていく。上空にエネルギーが収束していくのを見ていると——ついには形を成し、そこには白い竜が威容を誇っていた。冷気を纏っているのか、白い煙が辺りに立ち込める。

まるでドライアイスの塊だぜ。

「ココハ邪悪ナル魔神ガ眠ル——」

ていつ。空から雷のように剣を一閃させ、竜の首を落とす。喋る知能のある存在を殺すのは嫌だが、コイツに関してはただの魔法生命体……要はロボットみたいなものだ。故に躊躇もない。

そのまま境界ごと破壊し、先へ進む。洞穴でもあるのかと思いきや、その先には氷漬けにされた少女がいた。境界にしても、それを守る竜の属性からしても、魔神とやらを封印したのは氷結を得意とする魔法使いだったらしい。ちなみに僕は氷結のレモンが好きだ。

しかしこの少女……実に可哀そうである。封印された魔神というカッコいい字面に反して、クソダサイ体勢——杖を慌てて拾う瞬間を氷漬けにされている。もうちよつとなんとかしてやれよ。僕はとりあえず後ろに回って、氷越しのパンチラを堪能した。

この白パン少女が魔神かあ……というか、なにをもって魔神と称されたのだろうか。この世界には魔王なんてわかりやすい悪役もいなければ、魔物を統率する指揮者なんてものもない。となれば、彼女はなにをしかして魔神と呼ばれるようになったのだろう……興味ที่ 尽きないな。もちろん、白いパンツの中身にも興味ที่ 尽きない。

ところで、この封印を解くにはどうすればいいんだろう。殴って砕いたりすれば、中

身までいっちゃんいっちゃんで怖いな。というか意識はあるのか？ この状態で意識だけあつたら、それはそれで地獄だよな。

うーん……よし、一思いに斬ってしまおうか。ルイベみたいになっちゃったらトラウマになりそうだが、そこは僕の腕を信じてしよう。

「——ふっ！」

おっ、上手くいったようだ。滑らかな肌にも、安っぽくて白い服にも傷一つ付けることなく解放することができた。ケツ側から斬ったおかげで、たたらを踏んでよつん這いになった彼女のパンモロがよく見える。少し食い込み気味で、小さなお尻の形がまるわかりだ。

……さて、どういう反応をするのだろうか。封印された瞬間で止まっていたのか、それとも意識は保ち続けていたのか。ゆっくりと立ち上がり、手足の感覚を確かめるようにグツパグツパしている少女。そして数瞬の後、ゆらりとこちらへと振り向いた。

「くっ——あつははははは！ まさか封印を解く者が現れるとはな！ 何を思つて此処へ来たのかは知らんが……くっくっ、後悔する——」

「お久しぶりにございます、御方。貴方様の忠実なるシモベ、武でございます。遅ればせながら馳せ参じた次第……！」

「えっ……？ ………………そ、そうか。うむ、ご苦勞……」

わざわざ助けにきてくれたのに、覚えてないのはまずい——みたいな表情をしている。必死に思い出そうとしているが、まあ初対面なので忘れるもクソもないよね。しかし面白そうなので、もう少し続けることにしよう。

「そのご尊顔……ああ、懐かしくも美しい！ 御方の復活を心よりお待ちしております！」

「う、うん……そうか……」

「かつてのように抱きしめても？」

「だっ!? ……え、いや、え……？」

「……もしかして私のことをお忘れですか？」

「……い、いや！ そんなことはないぞ！ そうだ、存分に抱きしめるがいい！ かつてのように！」

「では失礼して……」

あー、やわつこい。やはりロクな娯楽がないこの世界では、他人からの超絶称賛か、可愛い女の子にお触りするくらいしか幸せがないな。しかし魔神というにはチヨロすぎるこの少女は、いったいどういう人物なのだろうか。

「……、こうしていると……その、なんだ。初めて会ったときのことを思い出すな。お前は覚えているか？」

「ええ、もちろん」

「そ、そうか！ もちろん私も覚えているが……い、いつぐらいのことだったかな。あと場所は……どこだったっけ……」

「忘れもしませんよ。貴方を初めて見た時——氷漬けに封印されていました。それを私が解放し、抱きしめた時が最初の出会いです」

「……それって今じゃない？」

「まさに」

「死ねゴラアツ!!」

「おっと」

魔神の少女から雷が迸る。なんとという偶然か、彼女も雷の使い手のようだ。金髪だった髪の毛が輝く白に染まり、パチパチと放電している。僕も戦闘状態はあんな感じだが、やはりコーカソイド系の人種の方が良く似合ってるな。僕の場合はコスプレ感が拭えないのが悲しいところだ。

「何を怒ってるんだ！」

「何もかもだボケ！」

「あんなに抱きしめあつた仲じゃないか！」

「大部分はそこだよ！」

雷がそこかしこに猛り、まるで山頂は荒神が暴れ狂っているようだ。木々は倒れ、魔法物たちがこぞつて逃げ出している。空には暗雲が立ち込め、天候すら変える彼女の魔法の凄まじさを物語っていた。

「…ククツ！ 謝るなら今のうちだぞ」

「ごめんなさい」

「…っ!? も、もつと気持ちを込めろ！」

「申し訳ございませんでした！」

「ぬぐっ…！」

「謝ったんだから許してくれるんだよね」

「うっ…」

「じゃあこの件はもうおしまいってことで。次は君が僕に感謝する番だぜ」

「な、なにっ!?」

「竜まで倒して、わざわざ君を解放したんだ。常識のある人なら、まずお礼を言うのが基本だと思うんだけど。もちろん君が『その程度』の奴だつていうなら、諦めるけど」

「ぬ、ぐぐ…あ、ありがとう…」

「もつと気持ちを込めろ！」

「ありがとうございました！」

「よし！」

「うがあああ！ なんなのお前！」

「人に名前を尋ねる時は自分から！」

「くつ……『ルーチエ・ルミナリア』だ。お前の名前は！」

「田中武と申します。よろしくお願ひします」

「あ、どうもご丁寧に……つてちがあう！ ぬうう……！ そもそもだ！ お前は何が目的で私の封印を解いた！」

「いや、君がすごく可愛かったからさあ」

「えっ……そ、そうか？」

「うん。今まで見たきた女の子で一番可愛いぜ」

「そ、そうか……！」

「……」

「……」

会話が終わってしまった。なんだか照れているようだが、この可愛さで褒められ慣れていないということがあるのだろうか？ 日本じゃないんだぜ、日本じゃ。スペインほど情熱的というわけではないが、草食系の男子は少ない世界なのだ。女の子を褒めるのはマナーである。

「ところで君はなぜ封印なんかされてたんだい？」

「え？ あ、ああ……私はちよつと特殊な体質でな。死んでも転生するんだ」

「それを体質と言ひ張る君に脱帽だよ」

「う、うるさいな！ それで……まあ何度も生き死にを繰り返しているわけだが、時には鬼だ悪魔だと罵られることもある。そりやまあ、気持ちわかるさ。我が子が生まれてきたと思つたら、中身は赤の他人だつたんだからな。でも！ だからつて迫害することないだろ!？」

「ふむふむ」

「やられたらやり返すのは当然だ。だから村の二つ三つ滅ぼしたら、凄腕の冒険者が私を懲らしめにきたんだ」

「やり返しすぎたんじゃない？」

「ひ、人は殺していないぞ！ 住むところがなくなつて、慌てる姿を笑つてやつただけだ！」

「うーん……」

「私に石を投げて笑つた奴らの村だ！ 当然の報いだらう！」

「むむむ……ノットギルテイ」

「だ、だろ？ ふふつ、話のわかる奴じゃないか」

もし僕が石を投げられて笑われたら、相手を裸にしてM字開脚で固定しつつ大通りに放置するくらいのはやるだろう。それを考えたら、彼女のやったことは子供のイタズラくらいのものだ……いや、そうでもないかな。まあどっちもどっちって感じだし、司法が恣意的しいてきなこの世界で、日本の観念を持ち出すつもりもない。彼女も言っていたが、やられたらやり返すのは当然である。

「…少し、気になることがあるんだが」

「なんだい？」

「そ、その……まあ、なんだ。私が可愛いから解放したと言っていたが……最初から外見を知っていたわけじゃないだろう。どうせタチの悪い魔物を封印したとか、悪人が眠ってるだとか伝わっていたんじゃないか？　ここへきた目的はなんだったんだ」

「魔物っていうか、魔神が眠ってるって噂を聞いてきたんだけどね」

「魔神……？　ふむ——まあ私の魔法の腕は神ってるからな」

「ひどい造語だ……」

「というか、答えになってないぞ。なら魔神に会いに来た理由はなんだ？」

「そりゃあもちろん、人々を襲う魔神を討伐したかったからさ」

「うん……？　もう封印されてたじゃないか」

「ああ、違う違う。封印を解いて魔神が暴れだしたところで、僕がそれを討伐して——

人々の称賛を一身に受けたかったんだ」

「お前が一番ギルティだよ！」

「まあこんな可愛い娘だとは思ってなかったけど」

「そ、そう？ えへへ……」

生き死にを繰り返しているというなら、精神年齢はもつと高くあるべきではなからうか。年相応にしか見えないのは、肉体の年齢に引つ張られているとかかな。しかしマツチポンプ計画も頓挫した以上、どうしたものか。むしろ彼女は どうするんだろう。

「君はこれからどうするんだい？」

「……ん？ そうだな……まずは私の封印を依頼した村のやつら——は生きていないだろうから、その子孫を酷い目に合わせてやるとしよう。その後で、私を封印した奴に復讐だ。あれ程の魔法使いなら、まだ生きている可能性は高い」

「また封印されるんじゃない？」

「前は油断してただけだ！ 躓つまずいて杖を落としたところを狙った卑怯者の魔法使いめ

……！ アイツだけは許さん——『ウエコウエルシア・ウィル・ウィンターホープ』！」

「……ふうん。でもさ、もう済んだことなんだし、もつと楽しんで生きたらどう？ 復讐が

悪いとは言わないけど、そこに幸せがあるかってなると怪しいぜ」

「なんだ、つまらん説得でもするつもりか？」

「暗い復讐なんかよりさ、人を助けて感謝される方が楽しいと思わない？ 僕と一緒に人助けの旅なんかどうかな」

「はん……人の幸せが自分の幸せってやつか？ 理解できないな」

「——馬鹿野郎！」

「つ!? な、なんだよ……」

「幸せな人間を見てたらイライラするだけだろうが！ あくまで『不幸な人間を幸せにしてやる』のが好きなんだ！」

「だいぶ酷かった！」

『『幸せにしてやった』って事実からくる優越感……それはただ上から見下すのとはわけが違うぜ。自分が善なる者であるという自尊すら満たす、高度なムーブ……！ 僕は善行のためなら、魔神を解き放つくらいはやってみせる！』

「邪悪すぎるわ！」

「惚れたか？」

「惚れるか！」

女はクズに惚れやすいと聞くが、クズな僕に女が惚れないのはどういうわけだ。クズの方向性が違うのか？ それとも……いや、考えても仕方ないか。それより彼女にどこを襲うのか尋ねてみると、やはりと言うべきか、ここから一番近いさつき村だそうだ。

誰が何をどうしようかと僕にとつてはどうでもいいのだが……さつき頂いたサンドイツチのお礼は返したいところだ。戦いたくはないけど。

僕の腕なら魔神だろうがなんだろうが一蹴できると踏んでいたのだが——先程の臨戦態勢の雰囲気を見るに、彼女は相当な実力者だ。戦う前から勝利を確信できるほど実力差があるとは思えない。僕は世界最強の剣士だと自負しているが、世界で二番目の剣士と三番目の剣士が同時に襲ってきたら、負けるのは間違いなく僕である。同じく、高位の魔法使いと戦って絶対に勝てる保証もないのだ。

「考え直す気はないかい？ 君があのか村を襲うなら、僕は戦つても止めるけど」
「なに？ 貴様……まさかあのか村の者か？」

「違うけど、多少の義理はある」

「ククツ——義理で命を落とすつもりか？」

「え？ さつき人殺しはしないって言つてたじゃないか。君はもしかして、大嘘付きのクズだったのかい？」

「えっ……いやまあ、その……」

「どっち？ 僕があのか村を守るために戦つた時、君が最低最悪の行為に手を染めるか否か！ はつきりしろよ！」

「う……いや、だから……殺すまでは、その……」

「殺すの？ 殺さないの？ ちゃんと言葉にしてほしいんだけど」

「だ、だから殺しまではせんと言ってるだろうが！」

「よし！ なら行け！」

「お前なんなの!?!」

「僕は君のもう少し後にいくから」

「な、なんでだよ」

「ここで僕が頑張っても、誰もそれを認識しないじゃないか。功績には相応の感謝があるべきだよ」

「封印を解いた責任と相殺じゃないか？」

「信賞は求めるけど、必罰は要らないんだよね」

「ク、クズう……」

「親の報いを子に……子孫に負わせる君も大概だと思っけど」

「〃血〃には責がある。貴族も農民もそこは変わらん」

「そういう風潮はいまだに馴染めないなあ……」

「ふん……どちらにせよ、お前が私より強くなければ成り立たん計画だな。クク——身の程を知れよ、クソガキ」

ギシリ、と空気が軋んだ。先程のものより更に重い圧が、場を満たす。うーん……結

局こうなるのか。とはいえ、どちらにせよ村の中で戦闘行為は下策だ。戦い終わった後に村がボロボロになっていけば、感謝の量が減ることは間違いないだろう。強者同士の戦いは、周りの被害も馬鹿にならない。特に片方が魔法使いともなると尚更だ。

空に暗雲が立ち込める。雷を扱う魔法使いの——その中でも高位の術者にとつては常套手段だ。環境とは、戦闘において重要な位置を占める。極寒や焦熱で平時と同様のコンディションを保つのは、人間である以上不可能だ。

故に高位の術者と戦う時は、環境を整えられる前に倒すべきである……と、団長が言っていたような気がする。対人での戦闘経験は本当に少ないから、そのくらいしか覚えてないや。しかし先人の教えは無視するべきではないだろう。

ならなぜ棒立ちで見えていたのかって？ ——そりや僕にとつても有利に働くからに決まってるじゃないか。

「ふう——せいっ!」

「なっ…!」

増える黒雲に剣をかざし、特大の雷を落とす。剣先から柄までが紫電を纏い——そのまま体へと流れゆく。バチバチと耳障りな音が何度か繰り返され、頭の天辺から足の爪先まで雷が行き渡った時、僕は雷そのものへと変化していた。

「ちい——!」

僕の変化を見て、彼女の杖先が揺らめく。『遅い!』とでも言つてやりたいところが、そんなことをしている暇があればさつきと攻撃するべきだ。光の速さとはほぼ同速を誇るこの状態は、無敵に近い。彼女が僕の行動を許した時点で、勝敗は決まったと言えるだろう。

しかし前にも言つたが、意識までが光速に近付いたわけじゃない。攻撃の際はまず場所を決め、そこに電気を流す道を作り、移動するという手順が必要なのだ。そこまで三手、攻撃も含めれば必要となるのは四手だ。そこだけを見れば速度の優位も下がるんじゃないかという意見も出るだろう。けれど、それを覆すのが「光速」というものだ。僕の認識においては複数の手順がかかるが、相手から見れば——いや、相手からは何も見えたものじゃないだろう。

彼女の背を移動場所に指定し、ほぼ同時に動き始める。剣を首筋に突きつけ、『身の程は知ったか?』とでも言えば戦闘は終わるだろう。

「身の程は知つ——ん?」

「ククツ、馬鹿め!」

——移動が終わつた僕の視界には、少女の背ではなく広がる空があるのみだった。そして少しの混乱の後、何をされたか理解する。「雷」とはジグザグに動くものであるとよく表現されるが、あれは空気中を効率よく通電させた結果であり、それこそが最短の

理想的なルートなのだ。

つまり『電気の通り道』を誘導された結果が、明後日あさっての方向への移動だったのだろう。こんなことを考えている内に攻撃していればよかったのだろうが、やはり焦りは戦闘を不利に導く。移動そのものが自分でも認識できない以上、強制転移をくらったようなものだ。瞬時の切り替えは中々に難しい——が、それでも次の一手へ移るまでに一秒はかからなかった筈だ。

けれど、戦況が覆るには充分すぎたのだろう。振り返った僕の視界には、掲げた杖に雷を落とす少女の姿があつた。それは先程僕自身がつた行動の焼き直しのようで、そしてよく知った状態である反面、客観的に見るのは初めての姿だった。

「ククツ——剣士と魔法使い……相反する者同士だが、強さを求めれば行き着く先は同じだな」

「まあ自然そのものになれば、負けることはないもんね」

この状態の本領は、攻撃よりも防御性能にある。この世から雷という現象を消してしまわない限り、僕は不滅である。もちろん彼女も同様であり、それが意味するところは

「…」

「…」

一応試して見たが、どんな攻撃も透過し合うだけだ。透過というか、接触面が同化してただけだろうけど……なんにしても、これが真の千日手せんいちてつてやつかな。たぶんどちらかがこの状態を解かない限り、事態はなにも動かないだろう。空の上で触り合いっこをしている、異様な状況が物悲しい。しかも感触はないっていうね。しかしそんな状況だというのに、彼女は勝ち誇った顔で勝利を宣言した。

「——私の勝ちだな！」

「え？　なんでさ」

「お前の目的は私を止めることだ。だが私の目的は、あの村の住居という住居を壊し尽くしてやることだ！　クククッ……！　目に焼き付けておくんだな——あの村から煙が上がる様を！　雷の雨でも降らしてやろ……ん？　………んんっ!？」

『あの村』というところで、遙か下にある村を指差した彼女。しかし予想外の事態に驚きの声を上げ、そしてそれは彼女の視線を追った僕も同様だった。なんと彼女が行動するまでもなく、村から煙が上がっていたのだ。

「…燃えてるね。既に」

「わ、私はまだ何もしてないぞ！」

「ん……あれは……魔物の群れ？　いや、違うな。統制も取れてないし——あつ」

「な、なんだ？」

「君が最初に威圧してきた時、山の魔物が一気に逃げ出してたからさ。たぶん恐慌に陥ったそいつらの一部が、通り道になるあの村を襲ってるんじゃないかな」

「……っ！」

「よかったね。労せずして復讐完了だぜ」

「……！」

「まあ住居だけ破壊できるような器用さなんて、彼等にはないだろうけど」

「くっ——……ふん。いい気味だ」

「そう。よかったね」

「……」

「……」

「——は、早く助けに行けよ！ 英雄扱いされたいんだろ!？」

「助けたいなら君が行けば？」

「ぐっ……誰が!」

「そう。じゃ、僕も行かない」

さあて、どう出るのかな。できれば彼女には復讐を諦めてほしいところだ。なんといつても、彼女が怒りをあらわにして出した名前——『ウエコウエルシア・ウィル・ウインターホープ』は、僕が所属する傭兵団の団長だ。なにやってんのあの人。

かなりのロリババアだとは聞いていたが、何百年生きてるんだろうか。とういかそれだけ生きられるなら、魔法使いを目指せばよかった。目指す職業を激しく間違えた感。永遠の命とかはいらないけど、長生きはしたいよね。

まあ団長には恩があるし、恩人が狙われているとなれば僕も無視はできない。といっても、僕が守る必要があるかは不明だが——それでもだ。そのためには、彼女……ルーチエの改心が必要である。

この状況で憎む対象である村人を助けてしまえば、復讐心も揺れるだろう。なし崩しで団長への復讐も諦めてくれれば万々歳だ。彼女が生きてる限り団長を狙い続けるというなら、僕は守り続けるしかなくなるが、それはあまりに面倒である。ここでスツキリサツパリ復讐を諦めてくれるのがベストだ。

幸いまだ死人は出ていないみたいだし、村人は全て中央に集まっているようだ。電磁波を利用した知覚範囲の拡大くらい、彼女にとっても朝飯前だろう。この雷状態であれば、村の広場までコンマ一秒すらかからない。死人が出る直前に動いたって間に合うからこそ、僕も動かない。

——僕がどれだけ『動く気がない』と装えるか。彼女の義心がどれだけ復讐心に勝るか。ギリギリの戦いである。

「説得なんてする気はないぜ。誰かの心に響く言葉なんてのは、持ち合わせちゃいない

しね。そういうのは心が綺麗な人間がやるもんさ」

「…」

「強いていうなら、そうだね…：後悔だけはしないようにすれば？ 使い古されすぎて

サビが浮いてる言葉だけど、それだけに核心をついてるとも言えるし。死んでも終わらない君の人生に当てはまるかは、わからないけどさ」

「…お前は私を気持ち悪いと思わないのか？ 本来あるべき理ことわりから外れた、歪んだ魂を持つ私を」

「別に？ 見た目からわかる気持ち悪さでもあるまいし。生まれた瞬間に喋ってるの見たら、思ってたどころけど」

「…正直だな」

「何かを気持ち悪いって思うのは、どうしようもない感情だから仕方ないだろ？ 思っちゃうだけならいいのさ。重要なのは、それを口に出すかどうかさ。今の君は、嘘を聞いてほしくなさそうだった」

「…」

うーん…：あとひと押しくらいで行けそうな気がする。しかし僕の言葉は何かにつけ薄っぺらいと言われるし、あまり口数を多くしても逆効果だろう。沈黙は金、雄弁は銀である。

「もう戦線が崩れるね」

「…っ」

「…」

「…」

「…僕が人から感謝されたいのはさ、自分を好きでいたいからなんだよね」

「…?」

「どうしても、どうしても他人からの評価ってやつが気になっちゃうんだよ。そんな自分があんまり好きじゃなかったんだけど…もう根っこの方がそんなだからさ、いまさら変えようがないのさ」

「それで、お前はどうしたんだ…?」

「そう——僕が変われないなら、変わるべきは世界の方なんじゃないかって思ったのさ」

「…ん?」

「つまり世界全てが！ 僕を称賛するべきだと！」

「お前の思考回路はどうなってるんだ？」

「一緒に行こうぜ、ルーチエ。彼等を助ければ、僕の言葉もきつと理解できるさ」

大勢の人々から感謝される状況つてのは、麻薬など目じゃなくらいに中毒性がある。ツイッターで一度バズってしまった人が、もう一度それを味わいたくて嘘松ムーブ

をかますのと同じことだ。承認欲求とは、人に備わった本能である。彼女はあんまり人に感謝されたこともなさそうだし、ここは一度その快感を味あわせて、脳味噌を承認欲求漬けにしてやろう。さながら女騎士を目の前にしたオークの気分である。人を墮とす快感つてあるよね。

僕が差し出した手を握り返した彼女の瞳には、決意ではなく安堵が広がっていた。なるほど……欲しがっていたのは自分を変える言葉ではなく、自分の行動に対する言い訳だったってことね。人を見る目はかなりあるつもりだったが、僕もまだまだだ。

ま、でもそうだよ。人は悪い方へは簡単に傾くが、良い方には早々に変わるものじゃない。永く生きてる彼女なら尚更だ……今はこれで良しとしておこう。

——雷状態のせいで握手はスカツと空振ったが、目的は重なった。さ、傭兵の本領発揮といきますか。



イースシユタイン王国、ローゼングラム領、僻地“ノインベルク”。フリジツド山脈近くに位置するこの村は、王国において箸にも棒にもかからない、のどかな村である。魔物は山を降りることがあまりなく、むしろ偶のはぐれは食材として歓迎されるほどだ。

——そんな平穏な村は今現在、存亡の危機に陥っていた。山を覆った黒雲、鳴り響く雷鳴。何事かと不安がる村民たち。不穏な空気をいち早く察知し、村の中央へ人を集めた村長の判断は、行動としては間違っていないが——どうしようもない理不尽というのは、どこにでも存在するものだ。

「イグナーツさん！」

「こっちは大丈夫だ！ それよりケヴィン、矢を回収してこい。魔物の移動がいつまで続くかわからん……できる限り消費は抑えておけよ」

「はい！ ……しかしいったい何事なんでしょうね。急に天気も変わるし、なにか変です

よ今日は」

「…魔神でも復活したのかもな」

「はは、もしかしてカロリーネ婆婆さんのアレですか？ あの人の話を信じちゃったら、うちの村の周りは人外魔境ですよ。魔神と魔王と古龍と大精霊と……あと何がいましたっけ？」

「お前……割と話を聞いてやってたんだな」

「話の最後にお菓子が出たんで！」

強大な何かの気配に、魔物はこぞつて縄張りを後にしたが——村を襲ったのは、その中でも極々僅かな数だ。目的があつて村を目指したわけではなく、通り道をつつ切ろうとしただけなのだからそれも当然だろう。さらにその中でも臆病な個体はルートを変えているのだから、村の中へ直接入ろうとする魔物は、十数分に一回程度の頻度でしか現れていない。

しかし普段から魔物があまり出現しない関係上、村の規模から考えれば十分に脅威だ。なにより、普段はお目にかかれない強い魔物も含まれていたのである。はつきり「強者」と言える存在が二人しかいない状況では、厳しいものがあるだろう。二百人規模でしかない村の戦力としては、破格の力を有する彼等——弓の名手『ケヴィン・ヴァルツァー』、元冒険者『イグナーツ・ドゥーゼ』。この二人を持ってしても、今のノインベ

ルクの状況は危機的であった。

「……！ イグナーツさん。やっぱ矢の方は後にします」

「……ああ、そうしろ」

それを象徴するように、彼等の前に現れた一体の四足獣——「フランメリア」。獲物を焼いて食べる、一風変わった魔物として認知されている「脅威度A」の難敵だ。竜の幼体であれば餌にしてしまうほどの、強さと獰猛性を秘めた化け物である。

操る炎は調理用とは思えない火力を有し、通常の一軒家であれば瞬く間に消し炭となるだろう。ケヴィンとイグナーツの二人もそれを理解しているのか、今日一番の警戒を見せていた。特にケヴィンの方は、フランメリアという魔物に対して弓矢が役に立たないことを理解し、悔しそうに表情を歪めていた。

「援護に徹しろよ。倒す必要はないんだ……追いつ返せば、それでいい」

「だいたい気が立っているように見えますけど……」

「ビビってんのさ。コイツも逃げ出してきた口だろ？ 慎重で臆病な面もあるってこつた……手こずるかもしれないと思えば、すぐに退くぜ」

「そうっすかねえ……」

そうは思えない——と口に出しつつも、ケヴィンは矢に魔力を纏わせ、見当違いの方へ放つ。それを見るや、彼の方向へ飛びかかるフランメリア。しかし後方からの爆発

音に即座に反応し、身を翻す。

威力は低いが派手な光と音で気をそらす炸裂矢が役目を果たし、イグナーツが魔物への距離を詰める。しかし淡く光る火花がフランメリアの体から放出されたのを見て、慌ててきびすを返す。そして次の瞬間、光を発する炎の渦が立ち昇った。

イグナーツの家を含む、三軒の家が灰燼と化し——彼自身も苦しげな声を上げて体を折り曲げる。大火傷は免れたものの、熱された空気に喉を灼かれたのか、掠れた呼吸音がダメージを物語っている。

ケヴィンは焦りながら炸裂矢を何度か放つも、既に害はないと見切られたのだろう。大した効果も見せず終わってしまう。魔物に通じる攻撃手段は断たれ、彼にできることは精々が囷くらしいものだ——そして彼には、その覚悟があった。

冷や汗をかきながら半端な距離を維持し、気を引くように村の外へと足を向ける。イグナーツを救うにも、村の人々を救うにも、犠牲なしとはなりそうもない——そんな言葉が彼の脳裏に過る。しかしそんな気高い覚悟を神が祝福したのか、彼に救いの手が差し伸べられた。差し伸べられたのだが……それに問題があるとすれば、ケヴィンの思惑が考慮されていなかった点だろう。

フランメリアが逃げ出した要因——あらゆる生物を震撼させるであろう、神の雷がまたもや山の上に響いたのだ。そして間隔をあげずに、もう一度。それはフランメリアの

恐怖心を煽るには充分な衝撃であり、目の前の弱者を無視して逃げ出すのも当然のことであつた。

ただし、逃げ出したのは村の中心方向へだ。山からできる限り離れたいとなれば、それは当たり前の方向転換である。その行動を見たケヴィンは慌てて炸裂矢を放つが、フランメリアは一瞥すらくれることなく、一目散に逃げだした。

「追……うぞ……っ！」

「イグナーツさん！ 大丈夫ですか？」

「薬……草は、食つ……た……！」

「すぐに効かないでしょ！ 休んでてください！ 下手すりや氣道が塞がって死にますよー！」

イグナーツを諫めながら走り出すケヴィンであつたが、後ろからついてくる足音にため息をつく。息が上がれば、それだけ喉も苦しくなるだろう。それでも執念のように走り続ける彼を、呆れと尊敬が混じつた目で見つめる。

「……先に行きますー！」

村一番の俊足を持つケヴィンは、脚に風の力を込めて更にそれを速めた。フランメリアの足はそれほどでもないようで、離されはしないもの——距離が詰まることもない。そして避難した村の人々の前には、最終防衛ラインとして数人が控えていた。そこ

で躊躇しさえすればまだ大丈夫だと、ケヴィンは自分に言い聞かせる。しかし――

「くっ……!」

「……デイ……アナ……!」

まるで止まる様子のない魔物の後ろ姿に、ケヴィンとイグナーツは、ここにきて初めて絶望を覚えた。最終防衛ラインとはいうものの、多少なり腕に覚えがある程度の人間でしかない。燃え盛る車のように走る魔物を止められる力はなく、そのまま轢死^{れきし}、焼死の未来が目に見えていた。

なにより、その数人の中には――イグナーツの妻であるディアナも入っているのだ。後ろに守るべき者がいる以上、彼女は逃げないだろう……二人はそう確信していた。

「逃……逃げ……ろ……! デイ……アナ……!」

「くっ……そおっ!!」

ディアナ以外の数人は、魔物の進行方向から逃げ出したが――彼等を責めるのは酷だろう。蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う村民の逃走時間を、一秒伸ばすためだけに命を張れる人間はそういない。彼女がたまたまそういう人間だったと言うだけの話だ。

「う——おおおお!!」

無駄だと理解していながらも、手に持った剣を投げつけるイグナーツ。渾身の力で放った鉄の塊は、まるで棒切れのように尾で叩き落とされた。砕けるほどに歯を噛み締

めながら、妻に——細腕に握った昆を振りかぶるディアナに手を伸ばす。届く筈がなくとも、彼はそうせずにはいられなかった。

炎に蹂躪されながら引き裂かれる妻の姿を幻視したイグナーツ。しかしその幻影は、網膜を焼きかねないほどの光量にかき消され——次の瞬間、轟音が村に響いた。音に先んじて到着した極大の雷が、都合二本、落雷となつて迸る。

——そして消し炭となったフランメリアの居た場所には、白い雷と化した二人の男女が佇んでいた。



さて、僕は男に抱きつかれて喜ぶような趣味は一切ない。しかし——しかしだ。その

男がむせび泣きながら、男泣きをしながら、感謝の言葉を何度も述べながら抱きついてきたとすれば、アリよりのアリである。

自尊心が、自分が強者であるという優越感が、その他諸々の感情が満たされていくのを感じる。周囲のギャラリーが感謝の言葉を口々に叫んでいるところも、ポイントが高い。

後ろでは奥さんに抱きしめられているルーチエが、複雑な表情をしてされるがままになつていた。美女と美少女が抱擁を交わしている姿は、中々に悪くない光景である。

「ありがとうね、本当に……ありがとうね……！」

「あ、ああ……うむ」

「私が死んでたら、イグナーツがどんなに悲しんでたか……！ 本当にありがとう……！」

「ぬ……男が悲しむだのなんだのより、命を長らえたことを喜べよ」

「ふふっ、そっちも嬉しいよ。でもね、人間いつかは……そう、自分以外の人が喜んだり悲しんだりする方に一喜一憂しちゃうようになるの」

「……それは……」

「私の笑顔も、みんなの笑顔も……ここにいる全員の笑顔は、あなたがいなければ存在しなかった。だからね、何度でも言うわ。ありがとうって」

「あ、ああ……」

泣き笑いをする奥さんの笑顔は、少し見惚れるほどに美しかった。ルーチェは雷にでも打たれたように呆然としていたが、きつと彼女も承認欲求教会へと入信したのである。まるで教祖のように扱われるこの状況は、一度でも味わえれば逃れられないのだ。

「そーいやお前、さっきの雷に山の上の雷…」

「ギクツ」

いやまあ、落ち着いて考えればわかっちゃうよね。悪気はなかったが、この騒動の四割くらいは僕のせいなのだ。直前に山へと向かった僕は怪しすぎるだろう。ここは全てを謎にして、さっさと逃げるべきだろうか。

「もしかして、本当に魔神がいたのか？」

「あー、うー…：うん、そう。戦いの余波で魔物が逃げ出したみたいで、その、申し訳ないというかなんというか…」

「いや、いいさ。どのみちそんなのが山にいたんなら、遅かれ早かれこうなつてたかもしれないしな。未来の孫子まじこに背負わせる業がなくなつてもんよ。親の苦勞も責任も、子にや関係ねえんだ」

「…っ！」

ルーチェがまたもや呆然としている。とりあえず話の流れ的に、僕が魔神を倒したつぽい雰囲気醸し出されているので、余計なことには言わないようにしよう。そうだ、僕

はなにも嘘など言っていない。あちらが勝手に勘違いしただけだ。彼女がなにかボロを出す前に、さっさとお暇いとまさせて頂こう。

「あ、これ——氷竜の核氷って言って……超高純度の魔力の塊だから、あげる。高値で売れるから、復興の足しにしてください。充分賄えると思うんで……」

「おいおい、いくらなんでも貰えねーよ。もう返しきれねえほど恩を受けて——お、おい!?!」

「先を急ぐので失礼!。もし恩を返したいのなら、僕の銅像を立てて崇めといてくださいー!」

「スゴイこと言われた!」

「行くよルーチェ!。——ではでは皆さん、お元気で!。この村を救った僕の名前は『田中武』!。『田中武』でございます!」

「ええ……」

ピクリとも動かないルーチェを抱え、全力で走り始める。雷状態でなくとも、時速数百キロくらいは余裕だ。雷を扱う魔法使いや剣士は基本的に素早いし、雷への耐性も高い。雷化状態で千日手とは言ったが、そもそも互いの攻撃は通りにくかっただろう。

十数キロ離れたところでようやく一息つき、固まったままの彼女を下ろす。いったいどうしたというんだろうか。おっぱい揉んだりしたら我に返るかな?。まあ揉むほど

ないけど。

「ルーチェ？ さつきからどうしたのさ」

「わ、私は……いや、違う……じゃない、だから……」

「……？」

「わ——私は！」

「うん？」

「私は……変わろうと思う。お前の言った通り、人を助けると——清々しい気持ちになる。晴れやかな気持ちになる」

「そりゃいいね。僕としても願ったり叶ったりだ」

「だから、私はお前についていく」

「オーケーオーケー、旅は道連れ世は情け！ 二人で人助けの旅を楽しもうじゃないか」

「いや、私の目的はそれじゃない」

「……ん？ どゆこと？」

意を決したような彼女の瞳には、眩しい光が満ち満ちていた。後ろ向きな人間には不可能な、陽キヤ特有の瞳である。人間は簡単に変われないと言ったばかりだけど、これは前言を撤回せざるを得ないようだ。ルーチェは外見も内面も素晴らしい人間になったらしい。変われなかった僕からすると、ちよつとばかり嫉妬案件である。しかし目的

が違ふとはどういうことだろうか？

「お前は邪悪な善人だ！」

「ひどくない？」

「私の、やつとできた私の目標……！ 私が！ お前を真人間まにんげんにしてやる！」

「あ、間に合つてますんで」

「心配するな、もう迷いはない！ お前が本当の意味で幸せになれるように、お前を本当の意味で幸せにできるように——それが私の幸せにも繋がる気がするんだ」

「君、影響されやすいつてよく言われない？」

「今日からよろしく頼む。改めて名乗ろう……『ルーチエ・ルミナリア』だ。位階はお前と同じ『極雷』——『極雷の魔女』ルーチエだ」

「僕の話、聞いてる？」

サブカルクソ女なみに自己陶醉してる感。問題は、僕の人物眼が彼女の決意を本物だと判断していることだ。本気で僕を変えるつもりみたいだが、それは無理というものだろう。なにより、僕はこんな自分が大好きである。変わる必要性を感じない。

うーん……ここはさっさと逃げの一手だな。こういう時、雷の使い手は便利だ。なにせ大陸間の移動すら一瞬で終わるのだ。逃げを決め込んだ瞬間、相手からすればどうしようもなくなる。

「雷化状態で触れ合った時、お前の魂は記憶しておいた。雷と魂は密接に関わっているんだ……同じ『極めた』者同士でなければ、ありえなかつた現象でもある。いわば私とお前だけの……き、絆だ！ 惑星上のどこにいたって、お前を見失いはしない……！」

「嘘おん……」

「お前も私と同じで、普通とは違う魂を持っているな……まるで別の世界で生まれた人間みたいだ」

「くっ……色々と余計なお世話さ！ 僕は僕のやり方を変えるつもりはな——あばばばばばっ!？」

なにやら抱きつかれたと思つたら、体中に電気が走つた。もちろん恋に落ちたとかじゃなくて、物理的に痺れたのだ。しかしなぜだ？ 雷使いの耐性を考えれば、この程度の電気でどうこうなるわけがないのに。どういうことだつてばよ。

「お前が間違える度に、こうしてやる。雷使い同士といえどやりようはあるんだ。年の功というやつだな……私も辛い、これもお前のた——あばばばばばっ!？」

「なるほど、こうか」

「けほっ……お、おま……私がそれを習得するのにどれだけかかつたと思つてるんだ！」
「僕って天才だからさ。あと僕についてくるんなら、君が僕を否定する度にこうするぜ」
「の、望むところだ！」

「むう……諦めないのか。うーん……ま、いつか。一応メリットもあるし」

「メリット?」

「常に美少女を連れていると、モテない男の羨望が心地良いからね——あばばばばっ!

…せえいっ!」

「——んきゅっ?!? んんううっ…!」

「なんでちよつとエロくなつたの!?!」

ぐたつと地面に崩れ落ちたルーチエを抱きかかえる。同じ痺れ方をするなら、素の身体能力が高い僕の方が有利だ。そんなことは彼女もわかっているだろうに。僕のために〃〃というのは完全にルーチエのエゴだが、僕はエゴが強い人の方が人間らしくて好きだ。しばらくは付き合ってみよう。

…しかしお仕置きで痺れさせられる、か。そのうち『ダーリン好きだっちゃ』とか言い出しそうで怖いな。そうなら、虎柄の下着でもプレゼントしてやろう——うん、そうしよう。

問答

ノインベルクからフリジツト山脈を挟んだ向かい側には、イースシユタイン王国の中でもそこそこ規模の大きい街「ドライハイム」が在る。牧畜が盛んであり、名産が多いことで有名だ。特にチーズなどが美味であり、値段は高いが舌と胃を満足させるクオリティがある。

日本で食べられる大量生産品とは違い、ここでは主婦が家事の合間に作っていたりもするので、独特な風味を味わえるのだ。たまにとんでもない味に当たったりもするが、それもまた楽しみの一環といったところだろう。惜しむらくは、旅のお供に持つていこうとするとだいたい同じような味になってしまうことだろうか。保存を優先するとどうしても塩の含有量が高くなり、固く塩辛いチーズになってしまうのだ。

だからこそ、現地でしか味わえないチーズ料理には価値がある。胸焼けしそうなほどにチーズ尽くしのコースを堪能していると、ちつぽけな悩みやストレスなんて吹き飛んじゃうね。それでもあえて不満を述べるとすれば、目の前の少女のマナーの悪さくらいだろうか。

「ルーチェ……もう少しなんとかならない？」

「う……す、すまん」

「魔法使いつて高度な教育が付き物だろ？ ナイフとフォークの扱いも覚束ない術者なんて見たことないけど」

「あ、いや……たぶん魔法を覚えた頃は上流階級だったとは思うんだが、転生には記憶の欠損が付き物でな。最初の人生など、もうほとんど覚えていないんだ。基礎的な知識や魔法はしっかりと記憶にあるんだが……」

「へえ、そうなんだ。でも今の人生だつて十年くらいは生きてる訳だし、作法くらいは学ぶだろうに」

「ぬう……ほとんど一人で生きてきたんだ。仕方ないだろう」

「——君の話聞いてて思ってたんだけどさ、赤ん坊の頃から最高位の魔法が扱えたんなら迫害されるのっておかしくない？ 仮にされたとしても、どうにでもなるじゃん」

「……も、もう少し聞きにくそうに聞けよ！ だいぶデリケートなところだよ！」

「えー……だつて、僕を変えるまでついてくる気なんだろ？ 僕はそう簡単に変わる気はないし……そうなると、長い付き合いになるよね。だつたら気を置く仲にはなりたくないからさ。わかりやすく言うなら、ルーチエをもっと知りたいんだ」

「へっ？ ……そ、そう……まあそういうことなら、うん……」

「ルーチエも僕に気は遣わなくていいぜ。ゲップでもおならでも好きにかませばいい

「さ」

「するか!」

「あ、生理がきたらちやんと言うんだぜ——あばばばっ!?」

けふん……こんな屋内でやめてよね、みんな驚いて見てるじゃないか。人の視線を集めるのは、讚えられる時だけでいいんだよ。それに旅をする以上、そういった部分はついて回るものだろうに。使い捨ての便利な生理用品なんてないんだからさ。

「——つたく……というか、魔法の知識があつても使えるかどうかは別だろうが。お前ほどの剣士ならそのくらい知ってるだろう」

「いや、僕も世情には疎^{うと}いんだ。この世界にきてからはずつと戦つてばかりだったし」「なに? ……ああ、そういうえばお前も異色の魂を持つていたな。『この世界』ということ——別の世界からきたんだな?」

「別の世界なんて概念、まったく認知されてないみたいだけど……ルーチエは理解できるんだね」

「私の専門は雷と魂だ。後者の方を突き詰めていけば、別の世界の存在は自然と証明される。精霊界、天界、絶界——察するに、お前は天界からやってきたんだな?」

「ぜんぜん違うけど」

「ふがつ……!」

どや顔で断言して大外れとは、恥ずかしがる。変な声を出しながら顔を真っ赤にする彼女は、実に可愛らしい。肌が雪のように白いからか、頬の紅潮が鮮やかに映えて、そのギャップがまた尊い。プレシヤス。

「…ん？ いや、絶対に違うってことはないか。僕がいた世界が天界って呼ばれてるだけかもしれないし……天界ってどんなところなの？」

「そ——そうだろう、そうだろう！ 世界が多数あると認識しなければ、そもそも名をつけることに意味はないからな。私の推測に間違いはない——お前は天界の存在だ！」

「…で、どんな世界なんだい？」

「うむ。私の研究では、そこは魂だけが存在する世界と定義している。物質に依らない、いわば精神世界とも言える天界は——」

「あ、もういいや」

「なんで!？」

「だって絶対違うし。僕が生まれた世界はこの世界と大差ないぜ。どこも似たりよったりで……一番の違いは魔法があるかないかくらいじゃないかな」

「…魔法があるとなじや別物じゃないのか？ 人類の発展は魔法なくして語れんぞ」

「代わりに『科学』ってのがあるのさ。魔力ってエネルギーを根幹にして発達したのがこつちの世界で、電力ってエネルギーを基盤にして発達したのがあつちの世界。そのエ

ネルギー特性の違いが、そのまま文明の違いになつてゐるんじゃないかな？」

「ほう。興味深いな……その違いとはなんだ？」

魔法使いとは研究者の側面も持ち合わせているものだが、彼女もその例に漏れず、非常に好奇心が強いようだ。しかし口の周りを食べかすだらけにしているのは、とてもどうにかと思う。仕方なしにハンカチで彼女の口元を拭いつつ、僕は話を進めた。教育水準の低いこの世界では、複雑な話をちゃんと理解してくれる人は貴重で、打てば響くように疑問を返してくれる話し相手は得難いものだ。

「違いつてのは——『汎用性』^{はんようせい}の違いさ。電気エネルギーは安定性が抜群で、指定された環境下ならほぼ同じ性質を保つんだよ。つまり一度システムを構築すると、誰であつても一定の成果が得られる」

「ふむ……？」

「こつちの尺度で言うると、そうだな……主属性の魔法を三級以上で全て修めた魔法使いがいれば、生活に困ることはないだろ？ 少なくとも、衣食住においての利便性は相当向上するよね。科学はそういつた恩恵を、多数へ平均的に分配できるのさ——魔法使いを育てるより、遙かに安価で」

「——それは素晴らしいな。そうなると、魔力は電力の下位互換ということになるのか？」

「そういうわけでもないね。安定性つて点じや一歩劣るかもしれないけど、その分かなり融通が利くのが魔力つてやつさ。特に人の意志へ顕著に反応するあたりが、それに拍車をかけてるね」

「…？ あらゆる現象に意志が介在するのは、常識だろう？」

「人の意志だけで物質に反応を起こせるのはね、ルーチエ。僕の常識ではありえないんだ。だから多少調べてみたんだけど……その要因は、ありとあらゆるものに多かれ少なかれ魔力が内在してるからだった。魔力こそが、人の意志と物質の反応を繋げる回線になってる」

「ああ、その通りだ」

「あつちの世界には魔力がないから、人の意志なんていう不確定要素が混じりにくいわけ。同じ行動が常に同じ成果へ繋がるなら、結果は予測から大きく外れない。それは万事を効率化に導いて、急速な発展を可能にする。逆に魔力の扱いは個人の優劣が大きすぎて、画一的な管理は不可能だ……その代わり、あつちの世界では奇跡とさえ言える現象を引き起こせる。少なくとも、医療に関してはこつちの方が進んでるしね」

「ふむ……まあ一長一短といったところか」

くいつとワイングラスを傾け、上等なワインを気取りながら一気飲みするルーチエ。間違いなくお金の無駄な気がする上に、無理に呷あおったせいか咽むせている。真っ白な服に赤

い花が咲き、洗濯で取れるのか不安になるレベルで広がった。

「…ふう。腹も膨れたことだし、次はどこへ行くんだ？」

「とりあえず君の服を買わなきゃだよね」

「うん？ 別にこのくらいすぐに乾く」

そう言ったルーチエの言葉通り、紫電が走ったと思えばワインの染みは消えていた。どういふ原理なんだろうか？ まあ雷化する時は持ち物ごとそうなるから、それを応用したのかな。僕は感覚でやってるから、そういった制御は難しいけど。

「君に似合う服を選びたかったんだけど、大丈夫ならいつか」

「…っ！ ……——あ、あっ…！ ま、またこぼしてしまったなあ…！ これは少しっつこそうだから、とれないかも…」

「僕って食べ物を粗末にする奴が嫌いなんだけど」

「ふぐっ…!？」

「まあ愛ゆえにつてことにしておくけど、気をつけてね」

「あ、ああ、すまん——つて誰が愛だ！ 誰が！」

なんだかギヤーギヤー言っているが、どう見ても僕に気があるようにしか見えないけど。むしろついてくると言い出した時の言動から今までの行動を鑑みて、その上で気がないというなら、僕は女性を信用できなくなるぞ。

…いや、やつぱり違うのか？　そういえば昔にも、思わせぶりの言動や行動を繰り返しておきながら、実は彼氏がいた女性がいたな。マジで恋する五秒前だったせいか、子供心にシヨックを受けた覚えがあるが——ルーチエの件も僕の勘違いということであれば、これは実に恥ずかしい。

僕は恋愛否定主義者ではないが、リアリストでもある。その上で恋と愛を語るとすれば、あれは殺し合いに次いで緊張感のある戦いなのだ。駆け引きの難しさもさることながら、敗北者となった時に味わう屈辱と惨めさは計り知れないものがある。

僕がもつとも嫌う感情は、恐怖でも怒りでもなく——悔しさである。次いで同情心や憐れみといったところだろうか。たとえ絶望の渦中にあつても、憐れみと共に手を差し伸べられたなら、僕はそれを振り払う。クソみたいなプライドと言われようが、間違つた自尊心だと言われようが、それだけは認めがたい屈辱なのだ。まあ僕が他人を憐れむ分にはまったく問題ないけどね。

「…な、なんだよ。じつと見て」

「ううん。なんでもない」

ま、そのへんは置いとくとするか。こういうのは変に意識すると、いつのまにか惚れてしまつたりしちゃうからな。惚れられたもん勝ちで、惚れたもん負けなのは確定的に明らかなのだ。そして僕はいつでも“上”がいい。

「ま——そうだね。『ルーチェ』」

「な、なんだ？」

「僕の足を舐めたくなくなったら、いつでも言ってきたくれ」

「死ねゴラあつ!!」

「おっと危な——あばばばっ?!」

「ククツ、経験に裏打ちされたフェイントはどうだ……んきゆううつ?!」

「けほっ……接触しないでできないんだから、反撃は覚悟しとかなくちやね」

「けふん……痺れたあ……」

これ以上、奇異の目で見られるのは耐え難いので、シビシビしているルーチェを抱っこして店を出る。提示された金額より幾分か多めに払い、それとは別に店員さんへも心付けを渡す。こういうった行動で得られる小さな感謝も、僕の心を満たす要因となるのだ。

そしてそのまま服飾小物を扱う店に向かったのだが——やはり既製品の数は圧倒的に少ないな。まあ工業的な大量生産は行われていないので、当然だ。そもそも大量生産をしたところで、供給過多になるだけだろう。統計が出ているわけじゃないけど、この世界の人口は一億にも満たないっほいし。

飾られている数点の衣装は、販売目的よりも『職人の腕』を見せる意味合いが強い

だろう。この地方の民族衣装なのか、独特な装飾だけど良い趣だ。上下一体になった花柄のアンダーに、赤のオーバースカートの映える。腰から伸びた紐が胸でクロスして、首にかかる様式になっているようだ。棒にかかった厚手の赤いバンドナが、いいあしらいである。

「ふーん……ルーチエ、これなんかどう？」

「か、買ってくれるのか？」

「買ってほしくないの？」

「…ほしい」

「オーケー、素直なのはいいことだぜ」

すごい嬉しそう。めっちゃ嬉しそう。ここまで喜んでくれるなら、財布の紐もガバガバのユルユルになるといふものだ。店員さんはご飯の最中だったので、食べ終えるのを見計らってに声をかける。流石にこの世界で三年も過ごせば、接客の適当っぷりも慣れたものだ。そもそも店と客は対等であり、ことさらに謙へりくだつてくるのは特定の職種のみである。

とはいえ愛想が悪いというわけではなく、恰幅のいいおばちゃんが張り切ってルーチエのサイズを測り始めた。飾っているものと同じ誂えの服が欲しいというと、非常に機嫌が良くなった……彼女がデザインした服なのかな？

「どのくらいで出来ますか?」

「ほうさねえ……ま、明日の晩には間に合わせるよ」

「わかりました。じゃあ泊まりになるか……おすすめの宿とかつてありますか?」

「中央広場から少し東に行つたとこに、蜂蜜酒場つて酒場があるよ。二階が宿屋になつてるから、そこに泊まるんならこつちも少し安くしとこうかねえ」

「はは、じゃあそこに。お知り合いの方がやつてるんですか?」

「甥がやつてんのさ。ついでに斜向いの靴屋で靴も揃えてくれたら、もつと安くしとくよ。うちの服にその靴じゃちよつとねえ……」

「うーん、商売上手。じゃあそつちもお願ひします」

「お、おい……いいのか……?」

なにやら不安そうに見上げてくるルーチェ。なんとというかあれだな……最高位階の魔法使いとは思えないほど、幸せに不慣れなキッズである。日本であれば、強さは金に直結しないが——この世界は違う。強ければ稼げ、強ければ敬われ、強ければ地位も權威も手に入りやすい。それを考えると、彼女の態度はおかしいなんてもんじゃないだろう。まるでネグレクトにあつていた子供のようだ。

「ルーチェ、君は……それだけ強いのに、ちよつと卑屈すぎないかい? なんだつて思いのままにできくらの実力はあるだろ? 僕だつて君に勝てるとは断言はできない。

なら国の一つや二つ落とせる實力はある筈だ」

「…」

「さつき話が切れちやったけど、もう一度だけ聞いていいかな。なんで君はやり返さなかつたんだい？ 降りかかる理不尽に対して」

「…やり返したかつたさ。だが魔法とは、強大になるにつれ体への負担も大きくなる。最低でもこのくらい年齢になるまでは、使用に制限がかかる。特に私の魔力は莫大だからな……普通のガキと違って、段階を踏んで覚醒させていくことができるんだ。だから十の誕生日を迎え、ようやく魔力を開放し——やり返し始めたところで、あのさまだ」

「ははあ、強ロリや強シヨタがいなのはそういうわけか…」

「えっ？ ああ……よしよし」

子供の頭を撫でた経験はあまりないけれど、少なくともルーチェの髪はサラサラで撫で心地抜群だ。心地良さそうに撫でられたままの彼女の様子も、実に可愛らしい。油断すると首つたけになりそうだから、あまり直視しないようにしよう。

「…前の人生はどうだったんだい？」

「三つになる頃、殺された」

「…その前は？」

「あまり覚えていないが、少なくとも十になる前には殺されたんだろうな」

「ちよつと受け止めきれないんで、ここでサヨナラしていい？」

「おおい!？」

「いや、あんまり重いのはちよつと……」

「べ、別に重くない！ 私はすごく軽い女だ！」

「ふしだらな人もちよつと……」

「誰がふしだらだ！ 私はまだ——」

「ちよつと兄さん、料金は前払いで頼むよ？ あと宿屋と靴屋の方には、マルグリットに

紹介されたって言えば安くなるからね」

「あ、はい。ありがとうございます」

不幸な人間を救ってやるのが好きだとは言ったが、あまりに重いのは難しい。具体的に言うなら、精神的な傷を負っている人間とかは対象外なのだ。強さや財力でなんとかなるものならともかく、僕に精神的な癒やしを求められても困るといふものだ。

だつてそうだろう？ 別に自分を卑下するわけじゃないけど、僕はカウンセリングにもつとも向いてないタイプの人間だ。カウンセラーが優しくある必要はないけど、それはマニュアルあつてのことだ。医学のいの字も知らん僕じゃ、トラウマ抱えた人間を救う手立てなんてない。

まあ彼女がトラウマ抱えてるかっていうと、そんなことはないだろうけど。ただ十年も『与えられなかった』ことに慣れると、他者からの施しに強く反応してしまうってだけの話だ。そのうちそれが普通になることだろう。

「あ、そうだお姉さん。なにかお困りごととかないですか？ ドラゴンが襲つてくるとか、吸血鬼が徘徊してるとか」

「ふふ、お姉さんなんて歳じゃないけどねえ……アンタ冒険者かなにかかい？」

「ええ、まだ登録はしてないですけど」

「駆け出しが無茶するもんじゃないよ。何事もコツコツやつてくのが、一番の近道さ」
「はは、肝に銘じておきます」

別の大陸では最高位の傭兵だったが、その証がどこでも通じるわけじゃない。そもそも大陸間の移動手段も限られている関係上、互換性を持たせる必要性も薄いしね。そしてそれが何を意味するかというと、みんな大好き僕も大好き『最強の新人』とかいうカッコいい称号になるわけだ。

水戸黄門の印籠しかり、最近の創作しかり、老若男女問わず『実は凄い人だった』ムーブはカタルシスを得られるのだ。僕が別の大陸では凄腕だったとひけらかさないのも、そういうわけだ。まあ自分で自分を凄いとか言うのと、カッコ悪いってのもあるけどね。

「…まあでも、そうだねえ。最近、街の南側が少し不穏みたいだから——それが困りご

とつて言えば困りごとかねえ」

「不穩？」

「夜になるとねえ……『出る』んだよ」

ふむふむ、なるほど……ちなみにこの『出る』というのは、死霊とかそつち系のガちなヤツである。外から侵入された以外の理由で街中に魔物が出るとすれば、ほほほほこいつが絡んでいると考えていいだろう。

死んだ人間の恨みつらみが魔力を媒介にして現れる——というのが通説だ。この世界の人の意思は、やたら物理的な影響をもたらすのである。管理の杜撰な墓地があると死霊も現れやすいらしいが、ここもそういうことなのかな。

「……まあ南側はもともと治安が悪いからねえ。死霊のせいにしてなにか悪さしてる奴がいんじゃないかって、噂してる人もいるよ」

同じ街なのに治安が悪いのか……まあコミュニティが大きくなるにつれ、自然と格差はできるものだ。そしてそれらが混ざることとは稀で、大抵の場合はきつちり分かれていく。ヒエラルキーの下の方からすれば、追いやられたと言い換えることもできるだろう。裕福なこの街だからこそ『治安が悪い』で済んでいるが、財政難の都市だとガチのスラムとかあるらしい。

情報にお礼を言いつつ、店を後にする。靴屋の方でも完成は明日の晩と言われたの

で、ルーチェの身だしなみが整うのはもう少し時間がかかるらしい。まあオーダーメイドということを考えれば、むしろ早いほうだ。手作業に限るなら、魔法が使えるこちらの方が優秀というのはままだ。

「さて、空いた時間はどうするかな…」

「冒険者登録でいいんじゃないか？ 私も稼ぐ手段が欲しいしな」

「うーん…」

「ダ、ダメか…？ 確かに最初の登録料はお前に払ってもらわなければならんが…」

「ううん。ただルーチェにはこのまま無職でいてもらって、上下関係をはつきりさせておきたいなって…」

「ひどくない!？」

「二人以上の集団を存続させるコツはね、ルーチェ。立場を明確にすることだって団長が言ってた」

「…ふん、なら私がお前の上に立ってやろう」

「オーケー。じゃあ僕を養うために馬車馬ばしやうまの如く働いてくれ」

「…それどつちが上なんだ？」

「もちろん君さ」

「納得いかん…!」

憚然^{ぶぜん}としている彼女の頭を撫でると、表情から険が取れていく。飴あげるとか言われたら、ホイホイ着いていきそうで心配になるな。まあ彼女をどうこうできるような存在なんて、ほとんどいないだろうけど。

「冒険者ギルドは街の南側みたいだから、登録がてら死霊の噂も調べてみよつか」

「うむ。人の役に立つのは良いことだ」

「まったくもってその通りだね」

「…見返りは求めるなよ？」

「それは無理——おっと！ ふふふ、いつまでも抱きつけるとは思わないことだね」

「ぬう…」

「それにさ、ルーチエ。働きに対して報酬を求めるのは当然だろ？ それを否定するのは、君が他人へ善意を強要するのと同じことだよ」

「自分からお節介をして見返りを求めるのは、また違うだろう」

「僕は傭兵だぜ。だつたらそれは営業みたいなもんさ」

「なら適正な報酬を求めると言うに」

「お金も物も求めないんだぜ？ 良心的じゃないか」

「心は誰にも買えない、売れない…何よりも尊いものだ。それを要求するお前は、誰よりも強欲だ」

「…っ！ …言ってくれるね。復讐だのなんだの宣のたまつてた君が、それを言うのかい？」

「正しさが尊いと言っているわけじゃない。歓喜も悲哀も、憎悪も絶望も…：…みな等しく尊い。私の復讐は、私だけのものだった」

「…そう。ま、あの程度で考えを変える程度の復讐心だもんね。もともと大したもんじゃなかったってことじゃない？」

「…あの程度？ いいや、そんなことはない。村の者はともかく、私を封印した魔法使いの方は殺すつもりだった」

「…！」

「お前が——お前が奪ったんだ、私の復讐を。だから私もお前のエゴを奪ってやる…：…どれだけ時間がかかっても」

「…！」

…無理だと思うけどなあ。君の決意はなるほど、確かに尊いのかもしれないけど…：…僕にはとてもくだらないものに見える。そう思ってしまう心を持っている限り、本当の善人にはなれる気がしないね。

「…ふふ、ちよつとクサかったか」

「うん、だいぶ。聞いてて恥ずかしかった」

「うぐつ…！ う、うるさいな！ さっさと行くぞー！」

「はいはい——ん？」

「どうした？ ——っ！ あれは……」

南側の……さつきおばちゃんが言つてた墓地の方向かな？ ここからでも見えるくらい、死霊が空へと打ち上げられている。まず間違ひなく厄介な騒動だろう。

「いいところに行くわすじやないか！ 行こうルーチエ！」

「だからそういうところお！」

——仕方ないじやないか、それが僕なんだから。変えてくれるんだろ？ 期待しないで待つてるよ。頬を膨らませるルーチエの横顔をみながら、少しでも口元が緩むのを感じる。ガラじゃないんだけどなあ、こういうのは。